古典芸能研究センターからのお知らせ

古典芸能研究センターが現在取り組んでいる研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」（文部科学省平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択）では、日本有数の古典芸能関係コレクションを所蔵し、貴重な民俗芸能の宝庫である兵庫（摂津・播磨）に位置する本学の有形無形の資産を生かした研究拠点づくりを目指しています。

古典芸能研究センター展示室

企画展「京の謡文化とその広がり —京観世岩井家を中心に—」

企画展 京の謡文化とその広がり
—京観世岩井家を中心に—
期間：2015年7月6日（月）～8月7日（金）
午前10時～午後5時
土曜・日曜・祝日休室
場所：神戸女子大学古典芸能研究センター展示室
協力：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

平成27年7月6日（月）から8月7日（金）の期間、古典芸能研究センター展示室で、企画展「京の謡文化とその広がり—京観世岩井家を中心に—」を開催しました。この展示では、江戸時代に京都で育まれた独自の謡「京観世」をテーマに、センター初の試みとして、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの協力を得て、同センター所蔵岩井家(注)資料を中心に、古典芸能研究センター所蔵薗家(注)資料などをあわせて展示することで、京の謡文化と歴史について紹介しました。

(注)京観世五軒家（京観世の謡教授を専門とする家々）の内

企画展「説経「おぐり」の世界—説経節の広がり—」

平成27年10月13日（火）から12月11日（金）の期間、企画展「説経「おぐり」の世界—説経節の広がり—」を開催しました。この展示は、平成27年秋に古典芸能研究センターが開催した「説経節」に関わるふたつの催し、特別講座「説経節—人は神仏に何を托そうとするのか—」と公開研究会「説経節—情念の語り物—」にちなんで企画しました。センター所蔵の志水文庫から、説経「おぐり」に関連する資料として、説経のテキストである正本（しょうほん）や説経「おぐり」を基にしてさまざまに展開された浄瑠璃や歌舞伎の資料、「おぐり」の世界に大きく関わる仏画などを展示しました。

『せつきやうおぐり』（表紙の断片）

錦絵『春鬼驪小栗外伝』

特別講座「説経節―人は神仏に何を托そうとするのか―」

古典芸能研究センターでは、神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ秋期講座で特別講座「説経節―人は神仏に何を托そうとするのか―」を開講しました。

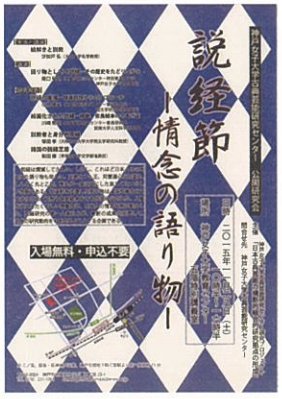
特別講座「説経節―人は神仏に何を托そうとするのか―」

期間：平成27年10月14日（水）～11月18日（水） 毎週水曜・全6回

1. 説教から説経へ
   小林 直樹（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
2. 「さんせう太夫」の物語 ―肌の守りの地蔵菩薩と氏系図―
   井上 勝志（古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授）
3. 「かるかや」の物語 ―四国の弘法大師伝承との関係―
   武田 和昭（真言宗 七宝山 円明院住職）
4. 「松浦さよ姫」の物語 ―人身売買と人身御供―
   阪口 弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）
5. 「小栗判官」の物語
   川端 咲子（古典芸能研究センター非常勤研究員）
6. 折口信夫の説経研究
   川森 博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学文学部教授）

公開研究会「説経節―情念の語り物―」

古典芸能研究センターでは、研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」の一環として公開研究会「説経節―情念の語り物―」を開催しました。



公開研究会「説経節―情念の語り物―」

日時：平成27年11月28日（土）10時半～16時半
場所：神戸女子大学教育センター 5階特別講義室
主催：神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」
（平成25年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択（研究観点「研究拠点を形成する研究」））

【実演と講演】

絵解きと説教
沙加戸 弘（大谷大学名誉教授）

【講演】

語り物としての説経
阪口 弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）

【研究発表】

説経の基層―唱導説話からのアプローチ
小林 健二（古典芸能研究センター客員研究員・国文学研究資料館教授）
絵画化された説経―絵巻、奈良絵本のさまざま
川崎 剛志（古典芸能研究センター客員研究員・就実大学人文科学部教授）
説教者と身分的周縁
塚田 孝（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
諸国の説経芝居
和田 修（早稲田大学文学部准教授）

科学研究費助成事業に採択された研究紹介

幼保一体化に向けた保育カリキュラム・モデルの構築

神戸女子大学文学部 教育学科 教授　大橋 喜美子

2012年「子ども・子育て関連3法案」によって、国は子育てを巡る現状を明らかにし、「質の高い幼児期の学校教育・保育の総合的な提供」「保育の量的増大・確保」について幼保一体化を推進しました。しかし、日本の幼児教育・保育は、1947年以来、法的には学校教育法と児童福祉法と二元化を保ち実施されてきたことから、幼保一体化（一元化）(注1)への移行は困難を極めました。

−10℃でも2歳頃までは暖かいお布団や衣類に包まれて可動式ベッドでお昼寝

2015年4月には、幼稚園と保育所（園）の機能の良さを統合するとした、子ども・子育て新制度がスタートしました。しかし、そこでは女性の労働力を支えるためとされた保育施設の拡大は、質より量が優先され、思春期を見通した子どもの発達を第一に考える保育の質は、深刻な保育者不足などにも影響され保育現場の問題をより深刻なものにしています。

本研究では、そうした国の施策による一連の流れから、どの子どもにも平等な教育・保育の提供が急務と考えて、幼保一体化に向けた保育カリキュラムの構築について取り組んできました。基礎研究として、幼稚園と保育所（園）の保育者の保育観の相違について実施したアンケート調査では、幼稚園と保育所（園）の保育者間において、保育の計画性に有意な差がみられ、両者の保育観に明らかな相違がみられました。保育の計画性に着目して研究をすすめると、近年の子どもを巡る問題から、特に自己肯定感の育ちを保育カリキュラムに組み込むことが必要であると認識するようになりました。

高い椅子とテーブルで大人と会話しながら…

そこで、幼保一体化を基本としているデンマークの「総合保育園」が自己肯定感の育ちを大切にしている点に注目しました。2014年と2015年に実施したデンマークの保育視察（写真参照）では、全ての環境を通して、自己肯定感を育てる保育が実践され、子どもは人格を備えた人として育てられていることを実感しました。現在、保育者と子どもの会話から、自己肯定感が育つプロセスについて分析をすすめようとしているところです。

保育の基本方針は、日本と類似している点もありますが、デンマークの保育は、全ての子どもに対して社会省(注2)が出している「社会サービス法　子どものためのデイ・ケア施設の目的」において明らかにされています。

日本の保育は2015年度から始まった新制度により一体化ではなく多様化されました。すべての子どもが平等に保育を受けることができるよう、本研究では、自己肯定感が育まれる保育観を軸とした「日本の保育カリキュラム・モデルを構築する」ことを課題としてすすめています。

木立の中でゆったりと遊べる園庭

（注1）一体化（一元化）…幼保一体化の用語は自民党から民主党へ政権が変わった時に、従来の幼保一元化に代わるものとして表記され、そのまま現在も使用されている。

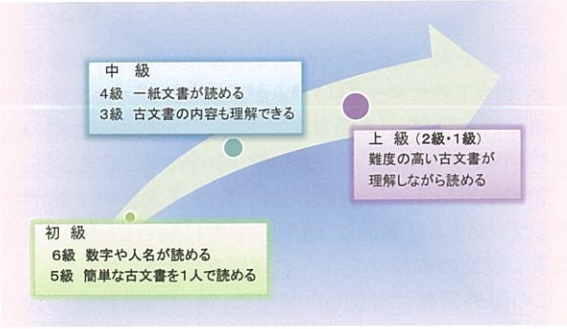
（注2）社会省…デンマークの保育指針は2004年ソーシャルサービス法に基づいて社会省より出されている。社会省とは、乳幼児保育を含む福祉関係や社会問題など所轄する省だが、2014年より「子ども、男女の平等、インテグレーション社会的リレーションシップ省」と所轄部門の名称が変わっているが、保育指針の内容はそのままである。

古文書検定 文学部史学科の取り組み

～歴史をひも解く基礎力を自発的に身につける～

神戸女子大学文学部　史学科では、日本の歴史・文化の特性と世界の歴史・文化の多様性をふまえて、自ら考え、調べ、議論することができる人材を養成することを教育研究上の目的のひとつとして掲げています。

歴史を学び研究していく上で欠かせないのが古文書を解読する能力です。「くずし字」を読む技能の習得にとどまらず、古文書が書かれた時代の特徴や、歴史知識の獲得を目指す自主学習システムとして「古文書検定」を実施しています。



到達目標

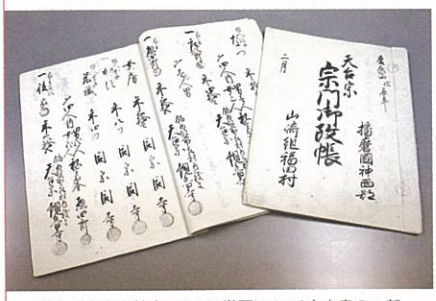
「古文書検定」は、平成21年度から3年間の試行期間を経て、平成24年度から学科の事業として正式に開始されました。入門者向けの6級から、あらゆる古文書を読みこなせる能力が身につく上級者向けの1級まで、6階級のクラスを設定しています。受講者は段階的に高度な古文書に挑戦し、より難易度の高い級を目指して学習に励むことができる仕組みになっています。また、テキストは史学科の教員が自ら作成し、eラーニングで好きな時間や場所で学ぶことができます。

古文書検定 専用Webサイト

平成27年7月に実施された同検定では、33名の受験者から6級3名、5級1名、4級2名、3級1名の計7名の学生が合格しました。

この検定では初めて3級の合格者が出ました。合格者の3年生の学生は「古文書は難しいけれど、読めるようになると勉強が楽しくなった。4年生になれば、武士の日記を読み解き参勤交代の研究をしたい。将来は古文書を解読する仕事に就きたい」と話しています。

博物館学芸員、図書館司書を目指す学生には、古文書を読みこなす力が特に必要とされ、自主的に学習できる古文書検定のWebサイトは大いに役立っています。また、同検定の勉強で解読力が身につき、資料を直接読み解けるようになると、郷土の歴史にも関心が深まり、卒業研究に取り上げる学生も現れています。



学生が古文書検定のために学習している古文書の一部

認定証授与式の様子
古文書検定委員会 委員長今井修平教授から認定証を授与される学生

認定証を手に史学科教員と共に記念撮影

交流年表
（姉妹提携等）

1983年　ハワイ大学（米国）
1993年　ケント大学（英国）
1997年　フライブルク大学（独国）
2000年　華南師範大学（中国）
2006年　ガジャマダ大学（インドネシア）
2006年　オークランド工科大学（ニュージーランド）
2006年　ピッツァー大学（米国）
2007年　チェンドラワシ大学（インドネシア）
2010年　ウダヤナ大学（インドネシア）
2010年　西安工程大学（中国）
2010年　カセサート大学（タイ）
2010年　高麗大学（韓国）
2011年　チェンマイ大学（タイ）
2011年　カリフォルニア州立ポリテクニック大学ポモナ校（米国）
2012年　アイルランガ大学（インドネシア）
2014年　静宜大学（台湾）

静宜大学（台湾）の海外研修はじまる

神戸女子大学と国際交流協定を締結した台湾の静宜大学で、初めてのサマープログラムが実施されました。文学部神戸国際教養学科、日本語日本文学科、史学科から台湾の文化や中国語を積極的に学びたい学生10名が参加しました。

2015年8月3日から3週間の日程で、静宜大学の中国語学習のプログラムに参加し、語学の学習に励むとともに、学外授業で現地の事情や文化への理解を深めました。

この海外研修に参加した学生は、神戸国際教養学科の王 霜媚教授が担当する「オフ・キャンパス・プログラムI」を履修し台湾の歴史や文化を事前に学習していました。

研修は、月曜日から木曜日までは集中的に中国語を学習し、護身術や台湾の料理も学びました。金曜日には、サーヴィス・ラーニングで、幼稚園や障がい者施設を訪問し台湾の教育と福祉への理解も深めました。学外では、大甲媽祖廟、故宮博物院、九族文化村などを見学し歴史や文化を学びました。

参加した学生は、短期間で中国語の聞く、話す、書く、読む能力が高まったと実感でき、再び台湾を訪れさらに知識を深めたいと話していました。

静宜大学で中国語を学ぶ様子

護身術を学ぶ学生たち

海上の神様・航海神として信仰を集める
媽祖が祭られている鎮瀾宮で記念撮影

北欧型福祉を学ぶ新たな「国際健康福祉プログラムⅢ」誕生

神戸女子大学健康福祉学部では、世界の健康と医療の現状における問題を知り、国際感覚を身につけ世界で活躍できる人材を養成することを目的のひとつとしています。

2015年度から、福祉国家として知られる北欧諸国の福祉について仕組みや制度を学ぶ「国際健康福祉プログラムⅢ」（担当：木村 あい准教授、清水 弥生准教授、泉 妙子教授）が新たに開講されました。今回は、デンマークのスタディツアーを実施しました。

事前に北欧の社会福祉、医療、労働環境、介護福祉について学び、2015年9月5日から1週間の日程で、同学部社会福祉学科の木村准教授と共に、3年生4名と4年生4名の学生が参加しました。

福祉施設、介護福祉士養成校、幼児教育機関を訪問し、福祉先進国デンマークの実情を学びました。学生たちは自然との触れ合いを重視した幼児教育や、無理なく介護できる機器が導入されている施設が特に印象に残りました。福祉に携わる人々が個人を尊重し介護の仕事を心から楽しんでいる姿を、自分たちの理想の将来の姿として捉え、今後の勉学の励みになりました。

訪問先の統合型幼稚園で記念撮影

統合型幼稚園で説明を受ける学生

介護福祉士養成校で高齢者の移乗を助ける
天井リフトの使い方を教わる様子

デンマーク・オレロップ体育アカデミー エリートチームによる「演技発表会&講習会」開催

遠くデンマークから国際親善のためオレロップ体育アカデミーのエリートチーム30名が来日、平成27年10月15日(木)に神戸女子大学須磨キャンパスでデンマーク体操の「演技発表会&講習会(ワークショップ)」を本学主催(文学部教育学科主担)で開催しました。

このチームは同アカデミーの卒業生で構成され、体操パフォーマンスやワークショップを通して国際交流を深めるために、これまで多くの国を訪問してきました。今回は5年ぶりの来日となりました。

本学は昭和56年にデンマーク体操部が創部され、現在も活発に活動を続けています。また、過去に3名の学生が同アカデミーに長期留学をした経緯があり、前回の来日に続き今回も本学で「演技発表会&講習会」を開催していただきました。

午前の講習会は、本学の学生や一般の参加者約200名がダンス、マット運動や跳び箱といった運動をエリートチームメンバーの指導やサポートを受けて行いました。

ワークショップの様子

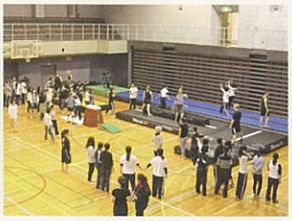
デンマーク体操部の演技

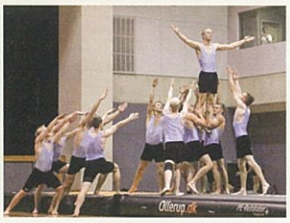
午後の演技発表会には、さらに多くの観客が華麗な演技を鑑賞しました。優雅なメロディーにあわせて、バレエを彷彿とさせるダンスから、迫力のある宙返りやこん棒を使った新体操を連想させる演技まで、観客はデンマーク体操の魅力を存分に味わいました。

午前のワークショップに参加した学生からは「久しぶりに汗を流し、すがすがしい気分になった」「エリートチームの方にサポートしてもらい、難しいマット運動も安心してできた」といった感想が聞かれました。午後の演技発表会で特別に演技を披露したデンマーク体操部の部員は「体操の演技でありながら演劇のような構成に感心した。今後の部活動の参考にしたい」と新たな意欲を語っていました。

司会は文学部教育学科の
齊山美津子教授

デンマーク体操は、競技体操ではなく、多くの人々の健康・体力・仲間づくりを目的とする体操で、筋力、柔軟性、巧緻性を高めます。音楽をアシスタントとして、幼児から高齢者まで無理なく楽しみながら身体機能を整える効率の良い動きを目指します。日本のラジオ体操は、デンマーク体操の流れを汲んでいます。



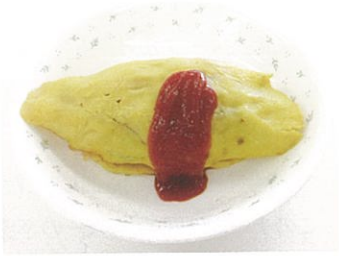


新開講「アレルギー対応食実習Ⅰ」

神戸女子短期大学食物栄養学科では、食を取り巻く多様な問題に対応できる栄養士の養成を目指しています。

平成26年度から、食物アレルギーに対応した授業「食物アレルギー論」を開講し、平成27年度前期は「アレルギー対応食実習Ⅰ」(担当：本田 まり准教授)を開講しました。夏休み中の集中講義に同学科の2年生約20名が受講しました。

乳幼児期の食物アレルギーの原因食品となる頻度が高い「鶏卵」「牛乳」「小麦粉」を使わず、代替の食材を使い、見た目や味も本来の料理と変わらずおいしく食べられる調理方法を学びました。


カボチャを卵に見立てたオムライスもどき

実習後の演習では毎回、栄養価計算などの栄養面の考察を行いました。最終日には、ヒヤリ・ハット事例を教訓にあげ、食品表示の再確認の必要性や、安全な食材の保管・取扱い方法、調理手順の工夫などについて確認し、さらに組織をあげての情報共有や事故防止対策が重要であることも学びました。

学生からは「食物アレルギー対応食を作る自信がついた」「オムライスもどきは、見た目が本当のオムライスみたいに作ることができ感激した」といった感想が聞かれました。

調理実習の様子

魚のコーンクリームかけ(左)、豆乳シチュー

最終日のおさらいの講義と実習のまとめの様子

管理栄養士養成課程の学生 料理教室「じゃが's キッチン」を開催

平成27年9月24日(木)神戸女子大学家政学部 管理栄養士養成課程の田中 紀子教授と4年生のゼミ生5名が、神戸市立和田岬小学校の5年生34名に、じゃがいもを使った料理教室を神戸市産業振興局 中央卸売市場運営本部本場と共同で開催しました。

じゃがいもは、北海道のホクレン農業協同組合連合会からご提供いただきました。

調理実習の前には、田中教授がミニ講義を行いました。一般的に知られていないじゃがいもの原産地、種類、栄養について説明し、メインディッシュのカレーについても、カレー粉が日本に伝わった経路や神戸との関わりなどをクイズも取り入れて分かりやすく講義しました。

メニュー

ターメリック・バターライス
カレースープ
ポテトサラダ
梅ジュレ
(学生が作り当日持参)

調理方法と手順の説明は学生が担当し、実習中は子どもたちをサポートしました。「カレースープ」は、市販のルウを少々とカレー粉を使い、じゃがいもや夏野菜をふんだんに使って栄養バランスの良いヘルシー料理にしました。「ポテトサラダ」では、「メークイン」と「男爵」の2種類を使いそれぞれの食感を味わえるようにしました。

この料理教室は、学生たちの食育の実践活動となりましたが、後日子どもたちから可愛い感謝の手紙をいただき、一層のやりがいと喜びを感じる場となりました。この経験は管理栄養士として将来活躍するための大事なステップとなるでしょう。

調理の手順を説明する学生

「じゃが's キッチン」で作った料理

料理教室を終えて田中紀子教授(左から2人目)と記念撮影

看護学部 初めての学外実習へ

神戸女子大学看護学部は、自らの役割を果たす判断力と実践力を身につけ、地域や社会の保健医療福祉の場において自立して活動できる看護の専門職を養成することを目指しています。教室で学んだ知識と技術を現場で実践できるように、4年間の中で多くの実習を経験するのですが、その第一歩となる「医療看護実習I」を平成27年9月14日(月)から18日(金)に行いました。

実習が始まる前には、実習中に起こりうる場面を想定し、患者と学生の安全を守るためどのように行動したらよいかを考える事前演習を行いました。また、院内感染について感染経路と予防策の講義があり、標準的な予防策として、衛生学的手洗いや手袋、マスク、エプロンといった感染防具の着脱をスムーズにできるよう繰り返し練習しました。

学生は、実習病院で患者に寄り添う気持ちをさらに培うことができ、看護師になる自覚も新たに真剣に実習に取り組みました。

事前の実習ガイダンスの様子

事前演習の様子
患者の安全を考える演習では、学生も患者役を体験

事前演習の様子
感染防具の着脱の練習と手技の確認

「関西デザイン学生シンポジウム2015」に参加

平成27年10月12日(月)にグランフロント大阪北館ナレッジキャピタルで「関西デザイン学生シンポジウム2015(注)」が開催され、インテリアや住空間のデザイン・建築を教育・研究する学部、学科が設置された大学や専門学校5校が参加しました。

今年は「フェアリーテール」(童話、おとぎ話)をテーマに、工業製品や建築空間を自由な発想でデザインしました。

神戸女子大学は、KIPA代表として家政学部家政学科来海(きまち) 素存(もとあり)准教授の3年生のゼミ生10名が、映像や模型を駆使して15分間の発表を多くの参加者の前で行いました。

昨年も、同シンポジウムに来海准教授の3年生のゼミ生が参加し、「おもてなしのデザイン」というテーマで神戸の中心街を想定敷地にした旅館を提案しました。今回は、先輩が題材とした旅館に、童話のストーリーと住機能を新たに融合しました。

童話は「オズの魔法使い」を選び、同作品の"仲間と協力する"というテーマをもとに、集客に悩む旅館をリノベーションしたシェアハウス「OVER THE RAINBOW」を考案しました。コミュニケーションがとれる共有スペースと、自由に過ごせる個室とのバランスが取れ、安心感があり、内装は色彩豊かにまとめられた夢の住宅としました。日常的な生活空間と童話を融合するというアイデアです。

コメンテーターの方々からは、ゼミ生が良くまとまってテーマに取り組み、童話をストレートに建築に取り入れたことや、手作りの模型に対して高い評価をいただきました。

(注)共催4団体　JCD:一般社団法人日本商環境デザイン協会関西支部　JID:公益社団法人日本インテリアデザイナー協会西日本エリア　JIDA:公益社団法人日本インダストリアルデザイナー協会関西ブロック　KIPA:一般社団法人関西インテリアプランナー協会

プレゼンテーションの様子

発表終了後に模型を持って来海素存准教授と記念撮影

オズの魔法使いを題材にしたシェアハウス
「OVER THE RAINBOW」の模型